

第2節 坂田塙台8号墳出土埴輪について

今回の調査によって、8号墳の周溝からまとまった量の埴輪が採取された。いずれも破片資料で全形を知ることができるものはないが、同工品分析の視点から分類を行い、本古墳に設置・使用された円筒埴輪の型式の把握に努めた。以下、同工品分類結果のまとめ・確認を行い、その中の特徴的な属性を既出資料との比較を通して、本古墳出土埴輪の位置づけをしておく。

1 坂田塙台8号墳の円筒埴輪

いずれも白雲母の細片を多量に含む胎土で、筑波山地南麓、桜川流域を中心に分布する「筑波山系の埴輪」（塙谷 1997・石橋 2004）の例に漏れない。基部粘土帯を用いた紐づくり、外面タテハケ調整を基調とし、無黒斑であることから窯窯焼成と考えられる。全体形は3突帯4段構成と推定される。しかし、各個体の製作法は一様ではなく、前章で報告したとおり、7類型の同工品を確認した。各類型の属性をまとめたものが第46表である。また、I群埴輪（後述）は突帯間隔の設定がされており、各段の高さは一定の規格による製作が想定されるので、各段の高さが確認できる資料を基に全形を推定した状況が第126図である。

7類型の同工品は、突帯間隔設定技法を用いたI群（6類型）と、「断続ナデ」手法によって突帯貼付を行ったII群（1類型）に大別された。I群は突帯間隔設定技法の適用から、鐘方正樹氏が定義（鐘方 1997・99、注1）した「IV群系埴輪」に該当し、川西宏幸分類（川西 1978）のIV群埴輪の系列にあるものと評価できる。A類の一部（25・26）に確認できた外面二次Bd種ヨコハケ調整（一瀬 1988）の存在はこれを支持するものである。II群は断続ナデ手法の適用から、「V群系埴輪」に該当し、川西分類のV群埴輪の系列ということになる。

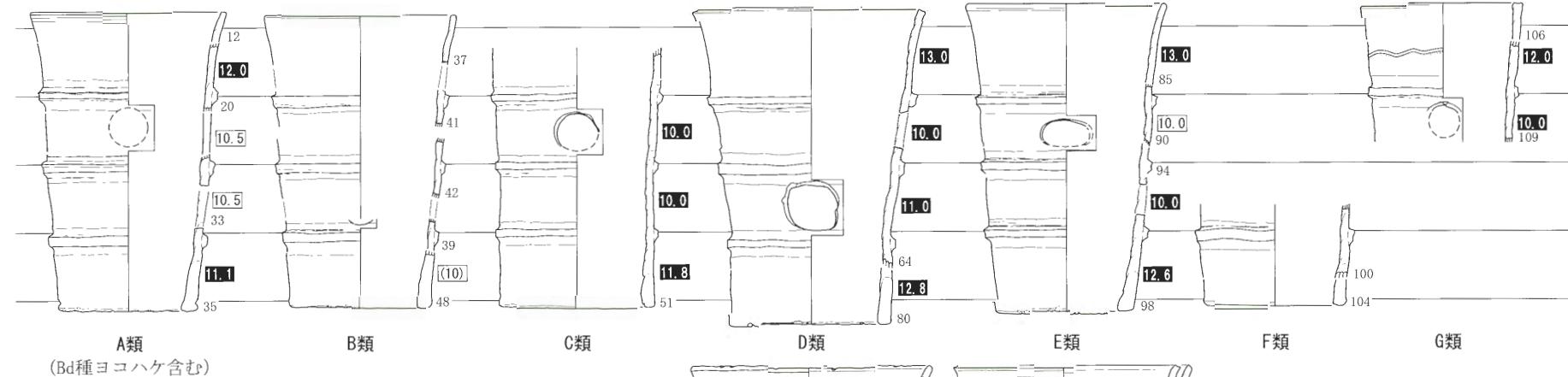
塙台I群埴輪 各類型間でばらつきを見せており属性は、成・整形手法である。最たるもののは突帯・口縁部と内面調整で、同工品の分類作業で第一の指標とした突帯の調整（ヨコナデ）と形状は、口縁部とともに6類型それぞれの状態を示している。それ故に同工品分類の指標となる訳である。内面調整（成形）は、A類は左上りのナナメ指ナデあるいはタテ指ナデ、B類ではタテ指ナデに加えて板（ハケ）状工具を用いた器壁を掻き取るような特徴的なタテナデが施され、接合痕跡を残さない丁寧な出来である。C類は砂粒の移動が目立ち、ユビケズリ（設楽 1981）とも称されるタテ指ナデ。D類は平滑面を示すことから板状工具を用いたヨコナデが施されたものと考えられるが、接合痕が顕著に残る粗いものである。E類も接合痕跡が明瞭なナナメ指ナデ。F類は接合痕

第46表 坂田塙台古墳群出土円筒埴輪の類型別属性表

分類群類	ハケメ	出土箇所	利き手	外面調整	内面調整			口縁端部調整	脇部器厚	突帯		透かし孔		ヘラ記号	
					脇部	状態	口縁部			間隔	調整	切り抜き	仕上げ		
I A 1	8号墳	右	タテハケ (→Bd種ヨコハケ)	左上・タテナデ (丁寧 (接合痕跡少))	ヨコハケ(外 面と別工具カ)	-	幅広	10~15	凹線2条 口縁端部外面 に凹線	上下面を最 後にナデ	右回り	無調整	外 面 左上り 平行斜線		
I B 1	8号墳	右	タテハケ	タテナデ、 タテ板ナデ・ ハケ	丁寧 (接合痕跡なし)	なし	ヨコケズリ	幅広	9~13	凹線	上下面を ナデカ	右回り	無調整	-	-
I C 1	8号墳	右	タテハケ	タテナデ、 砂粒移動目 立つ	粗い (接合痕跡明瞭)	左上・ヨコナ デ	-	不明	10~12	凹線	上下面を 喰くナデ	右回り	無調整	不明	不明
I D 2	8号墳	右	タテハケ	ヨコ板ナデ	粗い (接合痕跡著)	ヨコハケ →ヨコ(ヘラ) ナデ	-	甘い	10~12	凹線2条	下面ナデ あまい部分 あり	右回り	無調整	外 面 左上開き C字形	
I E 3	8号墳	右	左上ハケ、口縁・ 脇部は正逆ハケメ、 底部ヨコナデカ	左上ナデ (接合痕跡明瞭)	粗い	ヨコハケ →ヨコナデ	-	強い	10~12	凹線2条	上下面を ナデ	右回り	ナデ	外 面 ×形	
I F -	8号墳	右	タテ板ナデ	タテナデ (接合痕跡なし)	丁寧	ヨコケズリ	不明	10~13	不明	上下面を最 後にナデカ	不明	不明	不明	不明	
II G 4	8号墳	右	左上ハケ (→波状文)	タテナデ →左上ハケ	丁寧 (接合痕跡少)	左上ハケ	不明	狭い	10~14	断続ナデ	下面ナデ甘 く、凹凸	右回り	無調整	-	-
- H 5	14号墳	右	タテハケ	タテナデ	丁寧 (接合痕跡少)	左上ハケ	-	丁寧	8~13	不明	上下面を ナデ	右回り	ナデ	-	-
- I 6	14号墳 29トレンチ	左	タテハケ	右上・タテナ デ	丁寧 (接合痕跡少)	右上ハケ	不明	狭い	10~14	断続ナデ	下面ナデ甘 く、凹凸	左回りカ	無調整	-	-
- J 5カ	15号墳	右	タテハケ	タテナデ	ヨコハケ (接合痕跡少)	ヨコハケ	不明	不明	10~12	断続ナデ	下面ナデ甘 く、凹凸	不明	不明	内 面 右上り 斜線	
- K 7	15号墳 1・4区遺構外	右	タテハケ	タテナデ	丁寧 (接合痕跡あり)	ヨコハケ	-	不明	10~14	不明	上下面丁寧 にナデ	右回り	無調整	-	-
- L -	15号墳 2区遺構外	右	タテ板ナデ	ヨコ・左上 ナデ	丁寧 (接合痕跡なし)	ヨコ・左上ナ デ	不明	不明	9~12	断続ナデ	下面ナデ甘 く、凹凸	右回り	無調整	内 面 左上り 斜線	

円筒埴輪 同工品類型

I群



A類
(Bd種ヨコハケ含む)

B類

C類

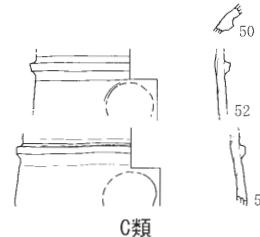
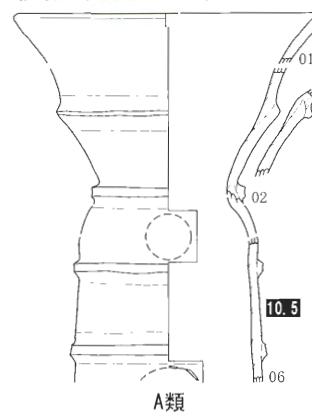
D類

E類

F類

G類

朝顔形埴輪 同工品類型



第126図 坂田塙台8号墳 円筒埴輪 同工品各類型の器形

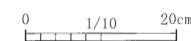
*ゴシック白抜き数字：突帯間隔計測値
同囲み付数字：同推定値

*単位：cm

*明朝数字：掲載番号

*水平ラインは10.5cm間隔。

第2突帯上稜をそろえて配置。



が残らない丁寧なタテ指ナデである。外面調整は前述のとおりタテハケを基調とするが、E類は左上りのナナメハケ、F類はハケメを記さないわゆるタテ板ナデ。内面の底部下端にはB類とF類でヨコケズリが施されている。透かし孔の切り取り面の処理は、E類のみナデ仕上げが認められる。ヘラ記号は破片資料の制約のために確認が不十分であるが、D類で左上が開放するC字形、E類でX形が認められた。

このように、各類型とも口縁部・底部の高さや口径・底径のばらつきはあるものの、口径32cm、底径21cm、器高47cm（I群平均値、器高は推定平均値）の逆台形のプロポーションは同調するようである。突帯間隔がそろえられていたのは第2段と第3段と見られ、各類型とも10cm前後の値を示している。形態的な近似性、型式的なまとまりをもった一群との印象が強い。また、A・B・C類の3類型の外面調整のハケメパターンは一致しており、同一工具の共用あるいは兄弟工具の製作・使用（犬木1995・城倉2009）が考えられる。

塙台Ⅱ群埴輪 口径26.3cmと細身で寸胴形の器形と直立する口縁部形状は、一見してI群と弁別される。また、突帯は下面の特徴的な凹凸から「断続ナデ」手法が用いられたものと判断され（注2）、その突帯の貼り付けに伴う器壁の歪みが指摘できる。明らかに系列の異なる製作が推察されるものである。しかし、胎土はI群と同じであり、製作地を大きく異にするとは考えられない。突帯間隔（10.0cm）、口縁部高（12.0cm）もI群と同調している。また、当群の特徴の一つに口縁部外面の「波状文」がある（後述）。

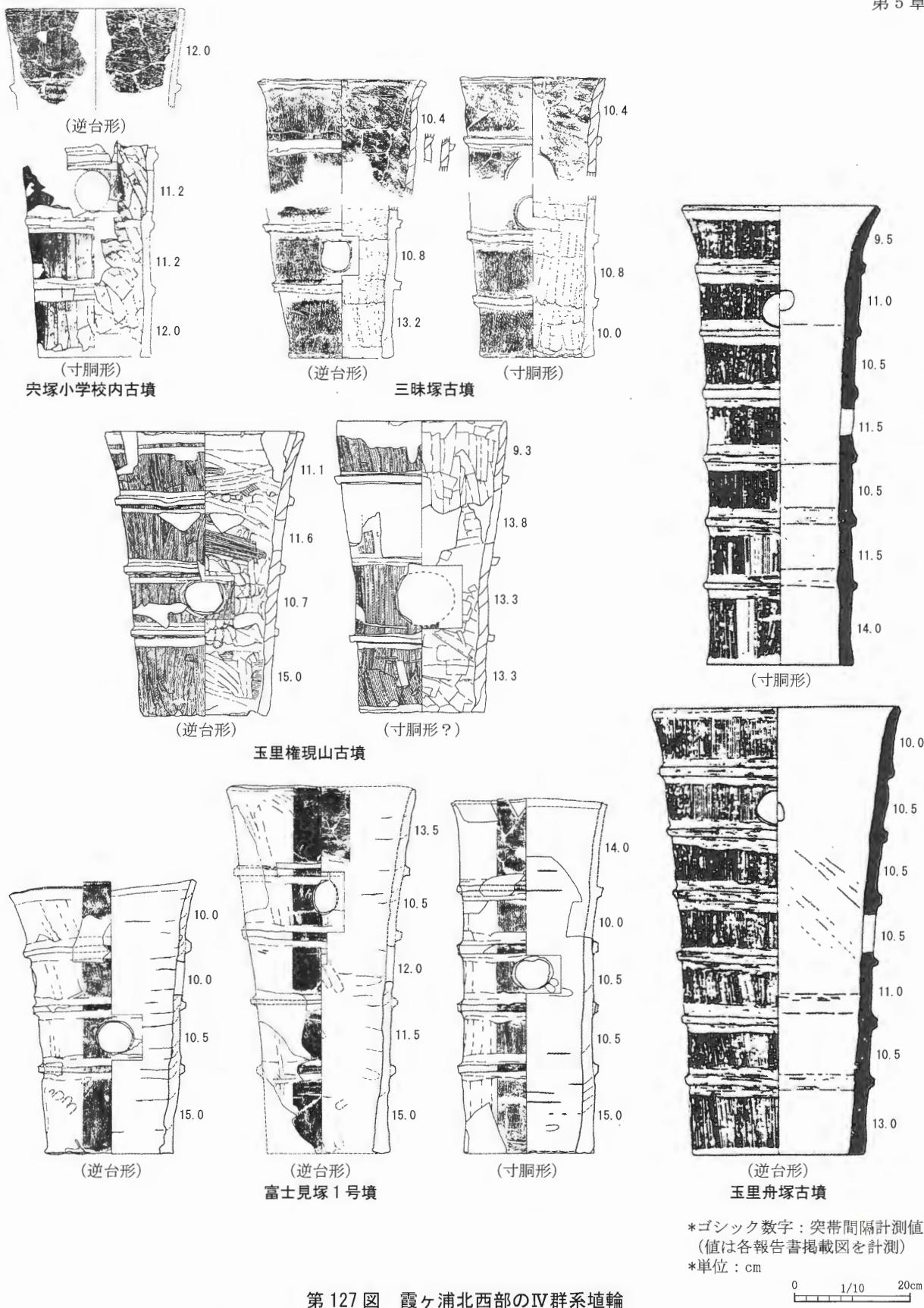
以上、全体の98.6%を占めるI群と、わずか1.4%のII群で構成され、前者は中期の型式を引き継ぐIV群系埴輪、後者は新式の後期・V群系埴輪であり、両者は全く異系統の型式である。主体をなすI群の各類型は製作技法、形態、法量ともに等価な型式群であった。今回、各類型の数量比を示すまでに至らなかったが、外面ナデ調整のF類は707.2g（0.6%）と1%に満たない。本書掲載量を見ていたいとも、他の類型はおおよそA群が最も多く、B～E類はほぼ同量を示す感じである。本古墳の埴輪製作は、A群の製作者を中心として行われていたものと思われ、わずかに認められたBc種ヨコハケ調整のものも、このA群製作者によってなされたものと考えている。

2 既出資料との比較

次に、8号墳の埴輪で把握された属性の中で、「IV群系埴輪」（B種ヨコハケ調整・突帯間隔の設定）と「波状文を施す円筒埴輪」に着目する。本古墳が立地する桜川流域を始め、霞ヶ浦北西部（高浜入り及び土浦入り地域）及び茨城県域の調査資料と比較しておく。

霞ヶ浦北西部におけるIV群系埴輪 茨城県域におけるIV群系埴輪は、窯窯焼成の導入を一つの定点とすると、5世紀中葉～後葉の石岡市の府中愛宕山古墳や小美玉市（旧 新治郡玉里村）の妙見山古墳を初現とするが（塙谷1997、日高2001）、資料の状況が今一つ十分ではない。その後、定形化した埴輪として、5世紀後葉のひたちなか市の川子塙古墳（斎藤2000b、田中・高橋2002）が挙げられる。馬渡窯跡C地区から供給されたものと見られており、Bc種ヨコハケが施されている。未発掘調査であるが、現状で把握できる資料は寸胴形（筒形）の器形で、突帯間隔と底部高をそろえる（高さ12cm）ものが知られている（斎藤2000a・b）。その他、窯窯焼成品と考えられるB種ヨコハケ調整の断片的な資料は、桜川市（旧 真壁郡大和村）の高森1号墳（斎藤ほか2003）や筑西市（旧 同郡明野町）の宮山観音古墳（日高2001）において確認されている。そのような状況下で今回、塙台8号墳で検出されたB種ヨコハケ調整の埴輪は、県域南部の霞ヶ浦周辺地域では初見例となった（注3）。しかし、外面調整にB種ヨコハケが施されないと見えども、5世紀末葉から6世紀前葉に位置づけられる当地域の埴輪には、突帯間隔設定の凹線（沈線）が見られ、「IV群系埴輪」と評価することができる。これらの資料を概観することによって、塙台I群埴輪の位置づけを考えておきたい。

霞ヶ浦北西部のIV群系埴輪は、土浦市の宍塙小学校内古墳（5世紀末葉、塙谷編1987）、かすみがうら市の富士見塙1号墳（旧 富士見塙古墳、TK-47～MT-15型式期、杉山ほか2006）、小美玉市の玉里権現山古墳（権現平



5号墳、TK-47～MT-15型式期、小林編2000)に見られる。また、突帯間隔設定痕跡は確認されていないが、同時期の資料として行方市(旧 行方郡玉造町)の三昧塚古墳(TK-47型式期、大塚・小林編1995、小林編2001)も検討に加える(第127図)。

形態は3突帯4段を基本形とし、富士見塚1号墳のみ4突帯5段との組み合わせとなる。いずれの古墳においても寸胴形(筒形)と逆台形の二者が認められる。富士見塚1号墳では鼓形を呈するものの存在が指摘されてい

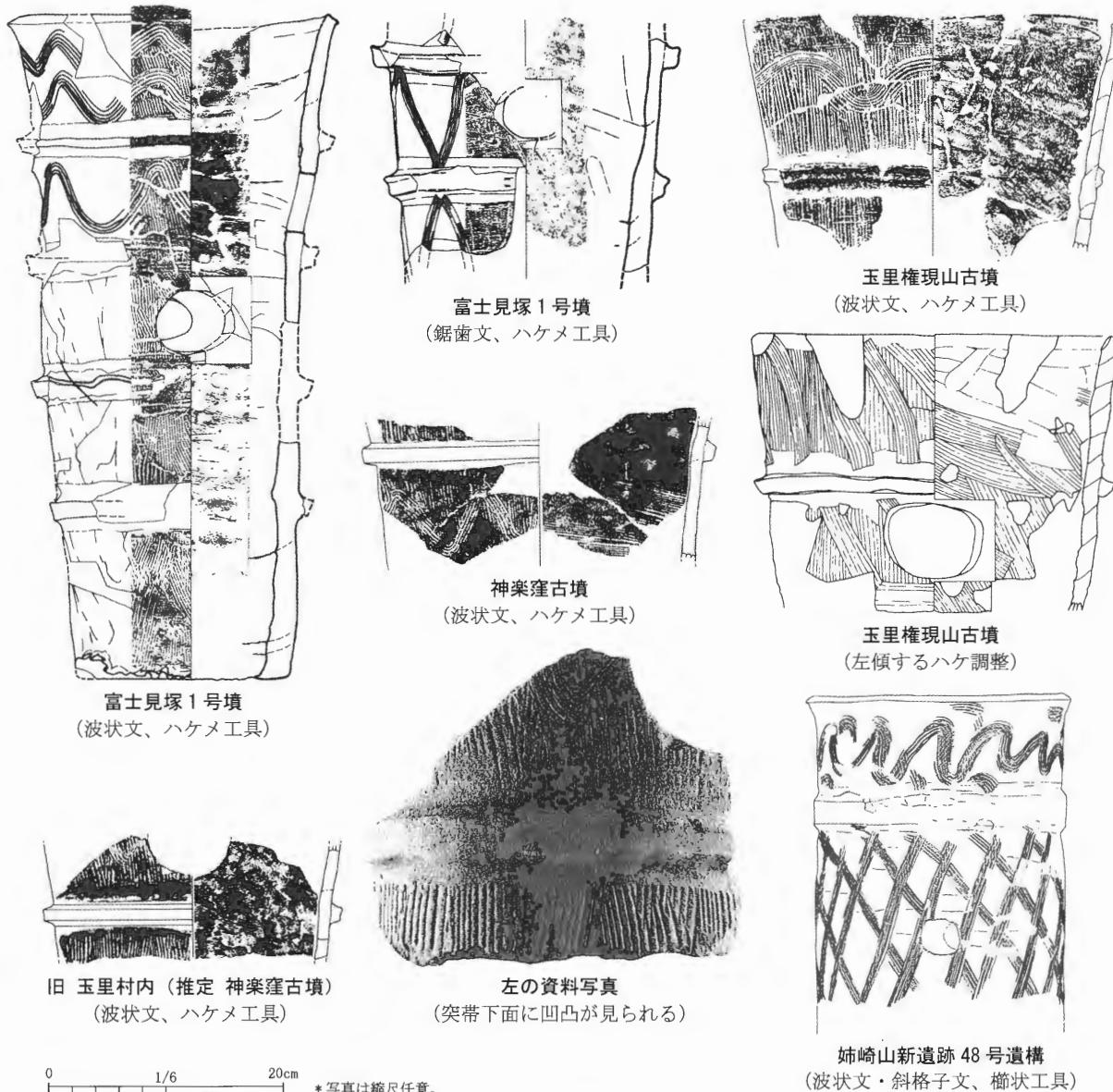
るが、安定した型式とは思われない。宍塙小学校内古墳では概要報告書に図示された資料が寸胴形であるが、未報告資料には逆台形のものもあるようである。各古墳とも全形が把握できる資料が少なく、二者の比率を分析することは難しいが、富士見塙1号墳では寸胴形が多く、権現山古墳と塙台8号墳では寸胴形が少ないように見える。成形法については基部粘土帯を用いるものと底部から粘土紐積み上げのものがあり、後者は富士見塙1号墳の一部と三昧塙古墳で認められる。前出の妙見山古墳は後者である（日高2001）。塙台8号墳のB類とF類に認められた底部内面のヨコケズリは、権現山古墳の一部に確認できる。

突帯間隔の設定はいずれの古墳においても、中間段（第2・3段）を規定する（そろえる）かたちで機能している。その間隔はいずれも10～12cmの間を示しており、権現山古墳の13.5cmのもの以外は差異を強調することはできない。底部（第1段）高はほとんどがこの突帯間隔を1～5cm上回る値を示しており、三昧塙古墳と権現山古墳では突帯間隔とそろえるものもある。一方、口縁部（第4段）高は突帯間隔とほぼそろえる傾向であり、1～3cmほど高いものも認められる。こうした各段の設定傾向は、IV群系埴輪と評価できる6世紀前半の玉里舟塙古墳（忽那2010）にも指摘できる。

こうして見ると、塙台8号墳を含めた霞ヶ浦北西部の5世紀末葉～6世紀前葉のIV群系埴輪は、個々のばらつき・個性を指摘されるものの、ある程度の（あるいは、緩やかな）まとまりをもった埴輪群と捉えることもできるだろう。そして、舟塙古墳の造営に伴い確立する小幡北山窯の埴輪製作へと引き継がれていく。ただ、基部の積み上げ手法や底部内面のヨコケズリの存在は、成形技術の根本的な相違であり、今後、その技術系列の追究をすべき課題である。

波状文を施す円筒埴輪　高浜入り地域で多く認められ、これまでに、かすみがうら市の富士見塙1号墳、風返9号墳、小美玉市（旧玉里村）の神楽窪古墳、玉里権現山古墳、石岡市の府中愛宕山古墳で確認されている（本田2002）（第128図）。風返9号墳と愛宕山古墳例は状態を確認していないが、他例はいずれも明瞭な櫛描き波状文を示している。今回、土浦入り地域に位置する塙台8号墳のG類を新たに加えることになったが、注意されるのはその製作法の系列である。塙台G類は突帯の貼付手法に断続ナデが想定される「V群系埴輪」であった。上記の既出例のうち、富士見塙1号墳例は、突帯間隔設定が行われた「IV群系埴輪」である。一方、神楽窪古墳出土の可能性が指摘されている旧玉里村内出土資料は、霞ヶ浦町郷土資料館第19回特別展展示解説書（千葉編1997）に掲載の写真（第128図下段中）を見ると、突帯下面に凹凸が認められ、塙台G類の状態と酷似している。本田信之氏の報告ではその点の指摘はないものの、断続ナデによる突帯貼付がなされたものと思われる。想定されるプロポーションや法量（胴部径）も近似しており、両者の製作事情の近さを強く感じる。また、権現山古墳の資料（第128図上段右）は法量（口径）が大きいものの、直線的に開く形状や口縁端部に明瞭な平坦面を持つところは、塙台G類とよく似ている。

ところで、波状文を記す円筒埴輪は、千葉県市原市の姉崎二子塙古墳（小橋2010、施文具〔以下同じ〕櫛状工具）、姉崎山新遺跡48号遺構（小橋2008、同、有黒斑）、同富津市の内裏塙古墳（小橋2011、ハケメ工具、TK-216型式期）、同木更津市の清見台A-4号墳（木川2001、ハケメ工具、IV期・5世紀後葉）等、東京湾東岸地域にも見られる。また、姉崎二子塙古墳、山新遺跡、内裏塙古墳では斜格子文も共存し、市原市の五靈台遺跡（高橋1998、櫛状工具）と富津市の富士見台2号墳（ハケメ工具、IV期）では斜格子文が見られる。一方、茨城県域では前述の波状文の事例の他に、斜格子文あるいは斜格子状のハケメが常陸太田市の梵天山3号墳（高山塙古墳、白井2002、有黒斑・2次ヨコハケ調整）や川子塙古墳（田中・高橋2002）でも確認されている。また、高浜入り地域の富士見塙1号墳の鋸歯文（ハケメ工具）や鋸歯状のハケメ、権現山古墳の「左傾するハケ調整」は文様効果が指摘・報告されているとおり、これらの有文埴輪の系列に属するものと評価できるだろう。東京湾東岸と高浜入りの事例とは型式的な距離があり直接的な対比は難しいものの、早くに白井久美子氏が指摘し（白井2002）、小橋健司氏



第128図 「有文埴輪」の類例

が想定する（小橋 2011）ように、古墳時代中期から後期初頭の常総地域内における各埴輪製作者の関係・製作事情を表すものと思われる。さらに、富士見塚1号墳で共伴している鋸歯文や有軸綾杉文、斜格子文などのヘラ描き線刻文様は、既に塩谷 修氏が指摘（塩谷 1997）している群馬県高崎市の三島塚古墳（車崎 1998）や長野県長野市の土口将軍塚古墳（大塚ほか 1987、TK-73型式期）で良く似ているものが存在している。

3 資料の位置づけ

V群系埴輪は「中期の末頃に」「出現し、後期に主体化する」（鐘方 1997）。具体的にはTK-208型式期（5世紀中～後葉）に河内地域で認められるようであるが、V群埴輪の成立はTK-23・47型式期（後期、5世紀末葉）である。また現状では、6世紀の茨城県域におけるIV群系埴輪は「小幡北山型」埴輪（稻村 2002）にも指摘され、同型埴輪は6世紀初頭～前葉に成立し、同前～中葉の玉里舟塚古墳の築造に伴い確立するとされる。すなわち、同県域ではIV群系埴輪が6世紀後半まで残ることが明らかであるから、IV群系埴輪の存在は下限を示し得ない。一方、前述の霞ヶ浦北西部の5世紀末葉～6世紀前葉の諸例と比較しても同時期のものと見て誤りない。さらに、墳台8号墳ではBd種ヨコハケが存在することから、「TK-23・47型式期、5世紀末葉」に位置づけるのが現在の所見では妥当なところと考えられる。

小 結

坂田塙台8号墳の円筒埴輪は、I群は霞ヶ浦北西部の「IV群系埴輪」に類似するものであり、II群は高浜入り地域に認められている「有文埴輪」の土浦入り地域における初例を追加することとなった。今後、土浦入り地域においても類例が発見されるものと思われる。現在認識されている古墳の分布を見ても、両地域の古墳の「格・質」と分布密度は高浜入り地域の優位が動かないものと思われるが、今回の調査事例によって、両地域の埴輪製作環境の親縁性を窺うことができた。両地域は地形的にも、塙台古墳群の西側が立地する上坂田地区の北西には大きな谷津が入り込み、高浜入りの河川・恋瀬川の支流・天の川上流域に近い。出島半島を大きく迂回せずとも、河川（内水面）を利用した水上交通とわずかな陸交によっても、地域（人や文物）の通交は頻繁であったと思われる。土浦入り・高浜入り両地域に分布する埴輪は、胎土の含有物を手掛かりとして異なる製作地（窯）が推定される訳であるが、今回、検討の対象とした後期初頭・5世紀末葉～6世紀前葉では製作環境の緊密な交流があったものと思われる。

さて、8号墳の埴輪は上記のとおり、大多数、6類型からなるIV群系埴輪（塙台I群）と、全体の1.4%に過ぎない1類型のみのV群系埴輪（塙台II群）で構成されていることが判明し、最大の特徴である。畿内地域の円筒埴輪の系統を明確に示した鐘方氏は、「後期の円筒埴輪を考える上で重要となるのは、それぞれの埴輪がどの系統に属して製作されてきたかを追求することであ」り（鐘方1997）、「関東におけるV期の埴輪展開（中略）を読み解くには、やはりV群系とIV群系の存在を指摘しなければならない。」（鐘方1999）と提言している。

今回、同工品分析の視点から出土埴輪の分類を行い、系統の把握をすることができた。何分、破片資料からのアプローチであるので、同工品各類型の構造（数量比や詳細な型式）とその意義を整理・把握するには至っていないが、霞ヶ浦西部地域における後期初頭の埴輪型式の一端を提示することができたのではないかと思う。今後は、新規資料の展開を期待するとともに、既出資料の再分析を進める必要があるよう思う。繰り返しとなるが、わかりにくくとされる茨城県域の埴輪も、「工人集団、技法といったもの、あるいは組列・系譜といったようなものをきちんと把握していかなければならぬ（車崎ほか2002）。前述の茨城県域における6世紀代の「IV群系埴輪の残存」は注意しなければならない点であり、これとV群系埴輪との係わりを読み解く必要がある。また、V群埴輪が「製作期間がほぼ100年に及ぶにもかかわらず、明確な型式変遷の追究が困難となっている」のは、「それまでに保持してきた埴輪製作上での規格性を放棄し、極限的に効率化させた製作工程によって、非常に合理的な量産体制」のもとに製作されたためである（鐘方2003）のなら、効率化・合理化の方向性、それを達成するための手法の創意・工夫、そして進歩の足跡があるはずである。今後、これをいかに見出し、整理するかに懸かっていると言えよう。

【注】

1 IV群とV群の分類は川西宏幸氏による円筒埴輪の5群大別（川西1978）に準拠し、各系統の定義は鐘方正樹氏が示したもの（下記、鐘方1997）に拠る。

IV群系埴輪：突帯間隔設定技法が用いられており、突帯間は均等幅である。（中略）断続ナデ技法を用いない。外面調整にはヨコハケを用いる。

V群系埴輪：突帯間隔設定技法を放棄し、粘土紐を目分量で器壁になでつけて突帯を成形する断続ナデ技法を採用する。このために突帯間隔や底部高・口縁部高はばらついて一定しない。外面はヨコハケ調整が省略されてタテハケのみとなる。

2 「断続ナデ」手法の評価については、日高慎氏による慎重な判断が示されている（日高2001）。確かに、日高氏が報告された妙見山古墳（突帯間隔設定沈線あり、無黒斑）や、鐘方氏がIV群系と位置付けた尾張型埴輪（愛知県豊田市の上向イ田窯跡I群の一部、鈴木編2009）などにも確認され、V群系埴輪以外にも伴う事実がある。本稿では系列の違い（IV群系とV群系）を指摘する観点から、塙台II群に認められる突帯下面の凹凸を「断続ナデ」の痕跡として、あえて積極的に評価したが、そもそも、「断続ナデ」手法は単なる突帯貼付手法であり、今後、藤井幸司氏が定義（藤井2003）するIV群系埴輪以前に認められる「突帯貼付技法A類」との識別が必要となる。

3 行方市（旧 行方郡玉造町）の兜塙古墳でB種ヨコハケ調整が確認されているようであるが、焼成法は不明瞭のようである（日高2001）。また、これまでに発掘調査が行われていない妙見山古墳で、今後、B種ヨコハケが発見される潜在的可能性はある。